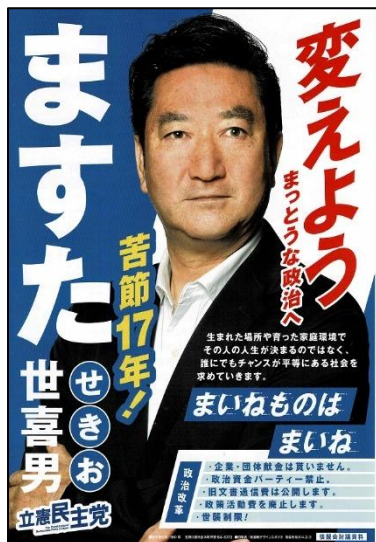


升田世喜男国政報告会 国政復帰後 7 カ月間の活動を語りました

昨年 10 月、7 年ぶりに国政復帰した升田世喜男衆議院議員の国政報告会は 5 月 10 日、むつ市来さまい館に約 50 名の支持者が参加し開催されました。

報告会は杉浦弘樹むつ市議の司会、山本信悦むつ市北後援会長のあいさつではじまりました。



升田氏の報告に先立ち、本年 7 月に行われる次期参院選青森選挙区予定候補者の福土ますみ氏および東京 7 区選出の松尾明弘衆議院議員がそれぞれあいさつしました。

その後、壇上に立った升田世喜男議員は衆議院安全保障委員会に所属し、緊迫

する国際情勢に立憲民主党の立場を強調しながら「なんとしても戦争だけは許されない」とのスタンスで活動、また党内では東北ブロック代表として常任幹事会メンバーとしても活躍されています。

現在、精力的に進めている活動としては①半島地域における防災対策の充実と経済自立への支援、②

地場産業育成の立場から海外への普及活動、③高齢者が国民年金だけで老健施設へ入居できる環境づくり、などに取り組んでいることを述べました。

また、本県の課題として昨今の海水の高水温などで大きなダメージを受けているホタテ漁業の支援、とりわけ金融支援が喫緊の課題であり、全力で取り組む決意を語りました。

最後に 7 月 20 日予定される参議院選、場合によっては衆参同時選に勝利し、本県の衆参国会議員 7 名のうち立憲 3、自民 4 という枠組みを福土ますみ氏の勝利により立憲 4、自民 3 へ逆転するために全力で闘う決意を示しました。



参院選青森選挙区予定候補者の福土ますみ氏も出席し支持を訴えました

前述の通り、本報告会には次期参院選青森選挙区予定候補者の福土ますみ氏も駆けつけ、自らの選挙への主要政策を訴えました。主な政策として①全国で唯一平均賃金が 25 万円を切る本県の雇用情勢を打

開するために中小企業や新規事業開拓が急務であること、②地方で懸念されている訪問介護事業所の廃止や倒産をなくすための国の支援の充実、などを挙げました。



報道記者として県内各地の課題に向き合い、経営者として新たな産業振興に取り組んできました。生活者の視点に立った政治に変えていく。もっといい未来を拓くための挑戦です！

福土ますみ

高レベル放射性廃棄物が六ヶ所村に搬入され、ひとつの区切りの 30 年が経ちました

「核のゴミから未来を守る青森県民の会」が早期搬出を青森県へ強く要望

1995 年 2 月にフランスから高レベル放射性廃棄物のガラス固化体 104 本が返還され、六ヶ所村に搬入されてから、はや 30 年が経過しました。青森県と六ヶ所村、事業者である日本原燃が結んだ協定では海外から返還された廃棄物の貯蔵期間はそれぞれ 30 年から 50 年となっています。そのことから本年 4 月が搬出期限の節目となります。そして廃棄物の貯蔵期間は最長でも 20 年後の 2045 年となりますが、最終処分場は調査から建設まで 30 年程度の期間が必要とされ、搬出のめどは立っていません。このままでは貯蔵期間が延長され青森県のイメージダウンを招き、実質的に最終処分地化されかねません。

こうしたことから、「核のゴミから未来を守る青

森県民の会」では 4 月 24 日、奥村栄、古村一雄共同代表以下 6 名のメンバーが青森県庁を訪れ高レベル放射性廃棄物搬出期限の遵守について、申し入れ及び公開質問状を提出しました。参加したメンバーが搬出に向けた取り組みについて、県はどう確認しているのか問うと、県の担当者は、「電力会社が検討しますと国に答えていることは承知している。検討状況の中身については説明を受けていないので検討中だと受け止めている」という内容にとどまり、自らの県としてのスタンスを最後まで明確にすることはありませんでした。

県民の会では公開質問状に対する回答を踏まえてあらためてこの問題を追及する予定です。

**高レベル貯蔵30年
搬出期限の順守を
市民団体、県に要請**

市民団体「核のゴミから未来を守る県民の会」は24日、県に対し、海外から返還された高レベル放射性廃棄物の搬出期限を国や事業者が守るよう、早急な対応を求めた。県庁で要請書を担当者に手渡した。

廃棄物がガラス固化体として六ヶ所村の一時貯蔵施設に初めて搬入され、26日で丸30年を迎える。貯蔵期間は30～50年間だが、搬出先となる最終処分場は建設の見通しが立っていない。市民団体側は「このままでは貯蔵期間が延長され、最終処分地化されかねない」との不安が増え続ける」と指摘。搬出期限の2045年までの工程表策定、期限の立法措置などを求めた。使用済み核燃料再処理工場（六ヶ所村）が操業すれば、新たな高レベル廃棄物も発生する。奥村栄共同代表は報道陣に「（新たに搬出する廃棄物は）搬出に関して具体的に示されておらず、『青森に置いてください』と言われかねない」と懸念を示した。（佐々木大輔）



4/25 東奥日報

高レベル放射性廃棄物（ガラス固化体）貯蔵施設

「核のゴミから未来を守る青森県民の会」が青森県へ提出した要請内容骨子

- ① 早ければ 30 年間の 2025 年 4 月に搬出できない理由を知事は県民に説明し、謝罪することを求める。
- ② 国に搬出期限順守の第一義的責任があり、2045 年 4 月より一日も早く、搬出するよう、国としてどのように責任を果たすのか、具体的な対応を早期に示すように求める。
- ③ 国に具体的な対応として 2045 年 4 月までの工程表の策定及び搬出期限の立法措置を求める。
- ④ 国は最終処分場開始時期を原子力長期計画（1994 年）では「2040 年代半ば（平成 50 年代後半）」と明記し、最終処分計画（2000、2005、2008 年）では、平成 40 年代後半（2023～2028 年）」とした計画が実現しない理由を県は国に確認することを求める。
- ④ 電気事業連合会の責任も大きく、同会にその実行を求め、その対応策を早期に示すよう求める。
- ⑤ 2045 年 4 月までに最終処分場操業は不可能で早期に最終処分場以外の搬出について国、電事連で検討し、その内容を県民、国民に説明するよう県は国、電事連に求めるべき。
- ⑥ 国は、最終処分法に基づく最終処分計画を 5 年毎に策定することになっているにも関わらず、2008 年以降策定していないことから、県は国に早期策定を求めるべき。（最終処分計画ができなければ、NUMO の実施計画もできず、概要調査地区の選定もできず、最終処分場選定は更に遅れる）
- ⑦ 最終処分場建設、操業に関する安全規制の早期法的整備を、県は国に求めるべき。

令和の百姓一揆 「農業を守れ！」

トラクター30台と4,500人が都心デモ行進

コメや野菜の高騰で食の危機が現実味を帯びる中、3月30日、北海道から沖縄まで全国14ヶ所で一斉に「令和の百姓一揆」行動が展開されました。東京でも農家と消費者4,500人が都内の青山公園に結集。都心をデモ行進し、「食と農を守ろう！」と声を上げました。

この日の主役はトラクター。デモに先立つ集會も、トラクターのドライバー紹介で幕を開けました。茨城、千葉、山梨、埼玉、神奈川などで農業を営む現役の「百姓」です。「みなさんの思いを背負って行進したい」「日本の食の未来は私たちがつくる」「農家と消費者、もっとつながろう」。みんな元気一杯、前向きです。中には、「オンボロのトラクターだが、最後まで走りきりたい」という人も。

主催者の発言は、山形のコメ農家で「令和の百姓一揆」実行委員会代表の菅野芳秀さん。強調するのは、「今日は長い闘いの始まり」であり、「ここを第一歩として農民と消費者が力を合わせ日本の農業を滅ぼす政治を変えていく」という大目標です。そのために「政治や信条の枠組みを超えて、広範な連携をつくり出していこう」と志高く呼びかけました。

午後2時半過ぎ、いよいよトラクター行進の出発。

山形から参加の山伏が吹き鳴らす法螺貝が合図。ふだん畑や田んぼで活躍する大小30台のトラクターの車列が、地響きを立てながら都心の公道を進む様子は壮観。沿道の人垣からは「頑張れ」の声が飛び、手を振って応えるドライバー。車体の正面にダイコンをぶら下げていたりもしました。トラクターにつけられたのぼりには「農業の時給は10円」「百姓は国の宝」「お米を守ろう」といった言葉が並ぶ。

トラクターを見送った会場では集會が続き、締めのアピールは、元農水大臣で在任時に農家への戸別所得補償を実施した実績のある山田正彦さん。説くのは、「農と食」を守る決め手が農家に対する所得補償にあるという一点だ。「欧米の農業を支えているのは国から農家への所得補償。日本には、それがない。農家と農業を守るために今こそ欧米並みの所得補償が絶対に必要だ」と熱いエールを送りました。

その後、参加者らが行進を始め、「農家を守ろう」「農家に補償を」などと声を上げ、渋谷区の代々木公園まで歩きました。(社会新報から抜粋しました)

集會には本県からも佐原わかこ衆院議員(れいわ)をはじめ多くの方が参加しました。



集會参加中の佐原わかこ議員

【令和の百姓一揆・主催実行員会からのアピール文】

ますます厳しくなる異常気象で災害が次々に生じています。また世界の状況は戦争に進んでいくなか輸送が止まれば、食料自給率が低迷している中私たちは何を食べればいいのでしょうか。 かりうじて現在の食料自給率を維持してきた日本の農家も「時給10円」で、それでも頑張ってきましたが、もうこれ以上農業を続けられない状況にあります。ヨーロッパやインドでは農家がトラクターで高速道路を占拠したり国会周辺を包囲するなどして抗議を続け、その声は確実に国民や政府を動かしています。日本も今が正念場！！日本も食を守り、農・漁業を守るために今一人一人が立ち上がらなければならない時です。農と食の問題はいのちの問題。今こそ、みんなで切実な声を届けるために、「令和の百姓一揆」で立ち上がりましょう！

下北地域保健医療圏で唯一の中核病院である下北医療センターむつ総合病院は看護師不足が顕著であり、その解消は喫緊の課題とされてきました。2004年に田名部高校看護科が閉科となって以来、看護師養成所の空白地帯となっていたため看護師を志望する学生は圏域外へ転出する必要がありました。一度圏域外へ転出した学生が再びむつ市に戻ってくる割合は低いのが現実です。

こうしたなか、むつ総合病院と八戸学院大学は2009年に看護学実習病院の協定を結んだことが縁となり、就職や臨床看護師に関する講義を設けるなど、看護教育における協働の実績と信頼関係があったことが、下北キャンパスの実現につながったものです。

下北キャンパスではオンライン講義とともに現地キャンパスでの対面講義を週2回実施し、臨地実習はむつ総合病院をはじめとするむつ市内の施設等で実施する予定です。

また、むつ市は一部事務組合下北医療センターと協力し、同キャンパスで学ぶ学生に対し入学金と学費の全額を貸与し、卒業後むつ総合病院で10年間勤務することで返済を全額免除する新たな修学資金貸与制度を設けるなど、看護師をめざす学生の経済的負担や自宅からの通学負担の軽減にも対応しています。

そうした意味でも八戸学院大学むつ下北キャンパス」の開設は、下北圏域やその近隣で看護師をめざす学生が地域で学び、地域医療を支える仕組みを創出する大きな一歩と言えます。（八戸学院大学・木村緑教授の文書から引用しました）

4/30 デーリー東北→

八学大むつ下北キャンパス 講義、本格スタート

オンラインと対面で学ぶ

むつ

日はバスで八戸市へ通い、対面講義を受けている。

本年度からむつ市に開設された、八戸学院大むつ下北キャンパスの講義が本格的にスタートした。入学した学生11人は、オンライン講義と八戸市のキャンパスでの対面講義を受講し、看護師に必要な教養や専門知識を学ぶなどして、地元でのキャンパスライフを楽しんでいる。

むつ下北キャンパスは、健康医療学部看護学科に特化したキャンパス。八学大によると、看護学科の卒業に必要な131単位のうち、文科省の基準で60単位までオンラインで受講可能だ。そのため、週2

4/23 デーリー東北



オンライン講義を受講する学生

看護学部新たな拠点に

八学大むつ下北キャンパス

関係者開設祝う

むつ

むつ市小川町の八戸学院大むつ下北キャンパスで26日、開設セレモニーが行われた。関係者約50人が、新たな学びの誕生を祝福し、地域医療を支える人材の育成に期待した。

むつ下北キャンパスは、看護師不足を解消しようと、市が大学側に働きかけ設置が決まった。初年度は11人が入学。週3回はむつ下北キャンパス、週2回は八戸市のキャンパスにバスで通い講義を受けている。

セレモニーで小林眞学長は「地域医療のために活躍する日を迎えられるよう頑張してほしい」と激励し、学生代表の越前ルル花さん(18)が「地元で看護を学べることに誇りを持ち、充実した学生生活を送ります」と決意。関係者がテープカットを行い、開設を祝った。

(佐藤航)

【編集後記】個人的な事情で自宅を空けることが難しくなり、各種の集会への参加やニュース作成のための取材も制約され、フォーラムニュースも中身があまりなく、殆どが請け売り記事になってしまい、新鮮味に欠けることは充分承知しています。単なる自己満足

に無理矢理、皆さんを付き合わせている感じです。高レベル核廃棄物の貯蔵期間が一区切りの30年目であることや、7月の参院選あるいはダブル選挙を控えている中ではじれったい思いが募るばかりですが、もう少しだけ本紙にお付き合いいただければ幸甚です。

【源八ヒノキ】

今も下北半島と津軽半島にうっそうと茂っている青森ヒバは、木曽ヒノキ、秋田スギとともに、日本三大美林に数えられている。

下北半島はその昔、南部領であったので、下北のヒバは「南部ヒノキ」とよばれ、良材として全国にその名が聞こえていた。

下北半島の仏ヶ浦のすぐ南にある牛滝村は、湾が深く入りこんで自然の良港であった。

今から三百年ほどの昔、この牛滝に坂井源八という人がいた。源八は南部藩から牛滝一帯の山の管理を任されていた。ヒバがほかの雑木に邪魔されていないか、山の木が盗まれていないか。また、藩からヒバの切り出しを命ぜられた時は、どの木を切ったらよいかなどの山の仕事をするほか、村の取り締まりもしていた。

元禄二年（1689）、ふとしたことで本誓寺という村のお寺が、火



前身が本誓寺である現在の真如庵

事で焼けてしまった。仏を敬う心の深かった源八は、なんとかしてお寺を新築しようと、村人たちと相談しあったが、とても村人だけのお金では建ちそうもない。

そんなある日、牛滝に富山からの船が着いた。その船には、富山から少し離れた氷見という町にある光善寺（こうぜんじ）月澗上人（げっかんしょうにん）という和尚さんが乗っていた。

上人は船を降りると、顔なじみの源八の家へやってきた。源八はしばらくぶりのあいさつをした後、村のお寺が焼けてしまったこと、新築したいが金がないことを、上



人へよもやま話として話した。すると、上人は、自分の荷物から重い袋を取り出して源八の前へ置いた。

「実は、わたしのお寺が古くなったもので新しく建て加えようと、全国をまわって寄付を集めているところです。おかげでどうやらお寺を建てるくらいは集まりました。これがそれです。どうぞ、これをお使い下さい。わたしのお寺は古くてもまだ屋根も柱もある。しかし、源八さんの所では焼けてお寺がないのですから」と。

こうして、上人のお金で本誓寺は立派に建て疑された。この話を聞いた南部の殿様は、「近ごろにない、いい話だ。上人の志に応えるために、そのお金の二倍にあたる南部ヒノキを切って、氷見に送ってやるがよい」といわれた。

源八をはじめ村人たちは、「これで恩返しができる」と、山中を探して、見事なヒバを切り出した。源八はそのヒバの切り口に光善寺と一本一本に書きこみ、船で送り出した。

何日かして、都からの船が牛滝に着いた。それにはヒバを積んでいた船頭が乗っていた。「富山の沖で嵐であって、船は転覆しましたが、みんなは無事。不思議なことに持っていったヒバが全部、氷見の浜に打ち上げられていた。

きっと仏様のおかげでしょう」元禄十四年（1701）、氷見の人たちが「源八ヒノキ」と呼んだそのヒバで、光善寺は立派に完成したそうです。

【雨降り地蔵】

「働きの少ない年寄りに、食べ物をおぼせるのは無駄だ。六十歳になったら、親といえども山へ捨てて来るべし」という『うば捨て』の決まりが、どこの村にもあった。

ここ、下北の風間浦村にも『うば捨て』のおきてがあった。おきてを守らぬものは村八分にされ、仲間はずれにされてしまう。

喜助の婆さまも六十歳になった。しかし、親思いの喜助は、「自分の親ば捨てるだなんて、そんなことできるもんでねえ」と、婆さまをうば捨て山になっている目滝山へ連れて行かずに、風間浦川のず



姥捨て山とされた目滝山

つと上流の木のかげに、小さな小屋を建てて、時々食べ物を持って行って、婆さまを養っていた。

その年の夏、どうしたことが、もう一か月も日照りが続き、川の水はカラカラ、田や畑の作物も死にそうになってしまった。

「このままじゃ、今年は凶作だすけ。米もイモも、なんも採れなくなってしまう。なんとかして雨ば降らせねえば」と、村人たちは隣村から神主を頼んで雨乞いの祈とうをしてもらったが、いっこうに雨は降りそうになかった。「困った、困った、なんとか雨ば降らせることできねえべか」村人たちは、寄るとさわるとただその話ばかり。

そんなある日、また村人にかくれ、婆さまにこっそり食べ物を持って行った喜助は、村では日照りで困っていることを話すと、婆さまがこんな話をした。

「なんでも昔、村に地蔵様があったそうじゃ。ところがその地蔵様は水が大好きで、自分から川へ転がって入ってしまったという話だ。みんなでその地蔵様を捜して、なんとかしたら雨ば降らせることができるかしらねえ」

婆さまのその話を聞いているうちに、喜助にいい知恵が浮かんできた。さっそく村へ帰ると、「実はゆうべこんな夢ばみたんじゃが」と、婆さまから聞いた地蔵様の話をした。すると、ワラにでもすがりたい気持ちの村人たちは、「そんな話、おらもじっさんから聞いたことがある。よし、捜してみるべ」というわけで、村人たちはみんな川へ入って地蔵探しを始めた。すると、なるほど村はずれの川底に地蔵様が転がっていた。

地蔵様を岸へ運び上げると、喜助はそばの木に地蔵様を太い綱でぐるぐる縛りつけてしまった。そうして、「さあ、もう川へは転がって行けまい。水が欲しいか、水が欲しかったら雨ば降らせろ！」といって、木の枝でぴしぴし地蔵を叩きはじめた。村人達も、てんでに木の枝で地蔵を叩き始めた。



すると、なんとしたことか、空がにわかに真っ暗となり、ざあーと大雨が降ってきた。この地蔵は、今も『雨降り地蔵』といわれ、風間浦村に立っているという話である。もちろん、喜助の話は、山へ隠していた婆さまから聞いたんだということを知って村人

たちは、「年寄りは大事にしねばなんねえ」と、その年から年寄りを捨てることを止めたそうだ。

【オオワシが授けた子】

昔、昔、下北の海辺の村に働き者の夫婦があった。

しかし、どうしたものかこの夫婦には子どもがなかった。子どものほしいこの夫婦は、朝夕揃って毎日、村の神社にお参りしては「神様、どうかおらだちに子どもを授けて下さいへ」と、お願いしていた。

お参りしてから、もう半年も経とうとしているのに、一向に子どもが生まれる気配はなかった。それでもこの夫婦はお参りを欠かさなかった。

秋の初めのある日のことであつた。夫は魚を取るため舟で沖へ漕いで行った。妻は浜辺でコンブを干す仕事をしていた。

と、今まで明るく射していた日の光が、さーっとさえぎられ、あたりは暗くなった。雲が出てきたのかなと思って、なにげなく空をあおいだ妻は、あっと驚いた。

それは、今まで見たこともないほどの大きなワシが空を飛んでいたのであつた。しかも、空からかすかに赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。目を凝らしてみるとオオワシは右の爪でなにかを掴んでいる。藁で作ったカゴのようだ。「あっ、赤ん坊だ！」。

オオワシは、ゴォーと音を立てて、すぐそばの高い岩山に降り立った。岩山から激しく泣く赤ん坊の声が聞こえてくる。



「赤ん坊、置いてけー。赤ん坊、連れてっちゃんねえー」と妻は叫びながら、もう夢中で岩山をよじ登って行った。

と、その言葉がわかったかのようにオオワシはイジコに入った赤ん坊を置いたまま、さーっと大空へ飛び立って、海の彼方へ消えて行った。

「ああ、よしよしよし」と妻は岩山の上で泣いている赤ん坊をしっかり抱きしめた。抱かれて安心したのか赤ん坊はいつの間にか妻の腕の中でスヤスヤ眠りはじめた。

夕方、漁から帰ってきた夫は赤ん坊を見て驚くやら喜ぶやら。しかし、オオワシにさらわれてきたということは、子どもの親がどこかにいるわけである。

次の日、夫婦は村の人たちにこのことを話して、どうしたらよいかを相談した。「神様が授けた子どもだべ」という人もあつたが、「ともかくどこかの子どもだべども、したども、この子の親を探すなんて、」とてもできる出来るものでねえ。まあ親が探して来たらかえしてやったらいいだ。それまでは神様が預けた子どもだと思って、可愛がってやればいい」ということに決まった。

夫婦はこの子どもを可愛がって育てた。一年たっても三年たっても、誰も探しに来なかった。「なんでも、南の方の国で凶作があつて、食うに困って赤ん坊を捨てた人もあつたそうだから、二の子も捨てられたんじゃないねえかな。子どもを欲しがっている夫婦のことを、神様がちゃんと知ってて。オオワシに運ばせたにちげえねえ。今度は自分の子だと思って育てたい」と、村の人たちに言われるようになった。

夫婦に可愛がられて育ったこの男の子は、父に負けない働き者のたくましい漁師になった。